

児童における人物画の大きさと有能感 およびホープレスネスとの関係 ——枠づけ法を用いて——

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 桜井 茂男

筑波大学心理学系 杉原 一昭

The relationship between human figure drawing size and perceived competence and hopelessness in children using the fence technique.

Shigeo Sakurai and Kazuaki Sugihara (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*)

Two hypotheses were examined. The first hypothesis stated that big and small human figure sizes drawn by children indicate low perceived competence while medium human figure sizes indicate high perceived competence. The Japanese edition of the Perceived Competence Scale (Sakurai, 1983) was administered to 75 sixth-grade children. The scale consists of four subscales, each measuring one of the four following areas: cognitive competence, physical competence, social competence, and self-worth. Approximately one week later, the subjects drew pictures of their own bodies on "fenced" paper. The drawings were assessed on four different measures: body height, size of head area, body size excluding the head, and total body area. The hypothesis was supported for the relationship between size of head area and self-worth. The second hypothesis stated that there is a negative relationship between hopelessness and all four body size measures. The Hopelessness Scale for Children (Sakurai, 1985) was administered to the same subjects. The hypothesis was supported for size of head area. Some problems are discussed and proposed new methods of testing these hypotheses are suggested.

Key words: human figure drawing, competence, self-esteem, hopelessness, self-worth.

Swensen (1959) は, Machover (1949) の古典的研究を基礎に, 人物画の大きさと自尊感情の間には正の関係, すなわち, 人物画が大きいほど自尊感情が高いという関係, があるとする仮説を提出した。しかし, この仮説を支持する研究は少なく (たとえば, Ludwig, 1968), 支持しない研究が多い (たとえば, Prytula & Thompson, 1973; Coopersmith, et al., 1976; Prytula, et al., 1978)。Hammer (1965) や Koppitz (1968) は, Machover 以来の諸研究を再検討し, 人物画の大きさと自尊感情の間には, 逆 V の字の関係, すなわち, 人物画が大きかったり, 小さかったりする場合には自尊感情が低く, 人物画の大きさが中程度の場合には自尊感情が高いという関係, があるとという新しい仮説を提出した。この仮説は, Delatte & Hendrickson (1982) によって, 一部支持されている。これは, 人物画の小さい人が低い

自尊感情を示すという点では Swensen (1959) の仮説と同一であるが, 人物画の大きい人の中にも低い自尊感情を示す人がいるという点で異なっている。人物画の小さい人は, 自尊感情も, そしてより高い自尊感情をもちたいという内的欲求 (動機づけ) も同様に低いために, 人物画は小さいのであろう。一方, 人物画の大きい人の中には, 自尊感情は低いが, より高い自尊感情をもちたいという内的欲求 (動機づけ) の高い人がいるのであろう。そのような動機づけの高さが人物画の大きさに投影され, 自尊感情が低い人でも大きい人物画を描くものと解釈される。したがって, この仮説では, 内的欲求という動機づけの側面が逆 V の字の説明には必要なのである。

以上のような解釈からすれば, 自尊感情のように, 自己意識の認知的側面 (遠藤ら, 1974) とか感情的

側面(加藤・高木, 1978)については, 人物画の大きさと逆Vの字の関係が認められるであろうが, たとえば, 達成動機づけなどの自己意識の動機づけの側面については, 人物画の大きさと間に正の関係が認められるのではなからうか. 今までは, 自己意識の動機づけの側面があまり研究対象にならなかった. この点に研究の遅れの原因があるように思われる. Swensen (1959)の仮説と Hammer (1965)および Koppitz (1968)の仮説は, それぞれ自己の認知的・感情的側面を強調する仮説と自己の動機づけの側面を強調する仮説と捉えれば, 2つの仮説とも両立するものと推察される.

従来, 人物画の大きさと関係については, 主に自尊感情に焦点が当てられて研究されてきた. 自尊感情は, 自己の価値についての知覚(遠藤ら, 1974)とか自己意識の感情的側面あるいは自己評価の感情(加藤・高木, 1978)と捉えられている. したがって, 「自己」についての全般的な有能感(sense of competence)と言い換えることも可能であろう. Delatte & Hendrickson (1982)によれば, 人物画の大きさと運動に関する有能感の間に, 正の関係が推測される. それゆえ, 人物画の大きさと関係については, 自尊感情という自己に関する全般的な有能感だけではなく, より具体的, 領域特殊的(domain specific)な有能感も加えて検討する必要があるように思われる. この点を検討するためには, 桜井(1983)が作成した Harter (1979, 1982)の認知されたコンピテンス(perceived competence)測定尺度の日本語版が有効であると思われる. この尺度は, ①学習に関する有能感, ②運動に関する有能感, ③仲間関係に関する有能感, ④生活全般に関する有能感であるところの自己価値(self-worth)という4つの下位尺度で構成されている. 自己価値という下位尺度は, ほぼ自尊感情に対応するものと考えられる.

また, 既述の予想からすると, 人物画の大きさと関係については, 自己意識の認知的・感情的側面とともに, 自己意識の動機づけの側面についても研究することが重要であろう. 前者は既述のとおり, 有能感を上げることによって, 領域特殊な面も含めて包括的に検討することが可能である. 一方後者は, 達成動機づけ, 内発的動機づけ, および近年臨床心理学や精神医学の分野で研究が進展しつつあるホープレスネス(hopelessness: 失望感)などを取り上げることにより, 先駆的, 基礎的な研究が可能になるものと思われる. ただし後者については本研究では, ホープレスネスのみを取り上げる.

ホープレスネスは, これまで成人の抑うつ

(depression)の中で, 最も重要な要素の一つと考えられ(Beck, 1972), 「自己および将来に関する否定的な期待」(Stotland, 1969)と定義されてきた. Beckら(1974)は, 成人用のホープレスネス測定尺度を開発し, 抑うつ, 自殺企図などとの関連を精力的に検討している. しかし, このようなホープレスネスに関する研究は, すべて成人を対象としており, 子どもを対象とした研究はなかった. Kazdinら(1983)は, この点に注目し, ホープレスネス概念を子どもにも適用し, Beckら(1974)に準拠して子ども用ホープレスネス測定尺度を開発するとともに, 自殺企図, 抑うつなどとの関係も検討した. 本邦では, 桜井(1985)がKazdinら(1983)の子ども用ホープレスネス測定尺度の日本語版を作成し, 信頼性および妥当性を検討している. しかし, 本邦におけるホープレスネスに関する研究ははじめられたばかりであり, 今後の発展が期待されている.

中井(1970, 1974)は, 分裂病者が箱庭を作る際, 柵で囲ってからその中に作品を作る, という河合隼雄の講演からヒントを得て, 分裂病者に描画させる時に白紙の端に沿って黒い枠をつける方法(枠づけ法: fence technique)を見出した. 中井は, 枠づけされた空間の中では, 「内面的, 隠された欲求や志行, 攻撃性, 幻想, 内実」が表現されやすく, 他方, 枠なし空間の中では, 「外面的, 防衛的, 虚榮的, 現実的」なものが表現されやすいという新しい仮説を提出している. 森谷(1983)は, この仮説を成人健常者を対象に, バウムテストを用いて検討し, ほぼ支持する結果を報告している. この仮説を採用すると, 人物画, 特に自画像の大きさについては, 次のような関係が予想されよう. 枠づけされた白紙に自画像を描く場合, 内面的な自己が投影されやすくなり, 自画像の大きさと自己の認知的・感情的側面の指標である自尊感情あるいは有能感との間には, 逆Vの字の関係が予想されるであろう. また同時に, 内的欲求(隠された欲求)も投影されやすいのであるから, 自画像の大きさと自己の動機づけの側面の指標である達成動機づけや内発的動機づけとは正の関係が, ホープレスネスとは負の関係が予想されるのであろう.

桜井(1984)は, 幼児を対象に有能感と自画像の大きさと関係について, 中井の枠づけ法を用いて検討した. その結果, 学習および運動に関する有能感と自画像の面積の大きさと間に, 逆Vの字の関係が認められた. したがって, 中井の枠づけによる効果は, 有能感と人物画の大きさと関係について, HammerやKoppitzの仮説を支持したといえよう. しかし, 有能感の測定に, 信頼性や妥当性の問

題が指摘された。

以上の知見や考察に基づき、本研究では中井の枠づけ法を採用し、児童の自画像の大きさと有能感およびホープレスネスとの関係について実験的に検討することを目的とする。桜井(1984)と比べると、本研究の特徴は以下の2点に要約できよう。第1は、被験者に児童(小学6年生)を用いた点である。桜井(1984)では、人物画の投影性を重視して、幼児を対象として用いたが、今回は有能感やホープレスネスの正確な測定に重点が置かれたため、より年長の児童が採用された。それだけ、人物画における投影性は犠牲にされたことになるかもしれない。第2は、自己意識の動機づけの側面であるホープレスネスを取り上げた点である。これは既述の如く、仮説の発展により、人物画の大きさととの関係を自己意識の動機づけ的側面でも検討するために取り上げられた。

本研究の仮説は、以下の2つにまとめることができる。

〈仮説1〉 枠づけされた画用紙に自画像を描く場合、自画像の大きさと自己意識の認知的・感情的側面の指標である有能感の間には、逆Vの字の関係が認められるであろう。

〈仮説2〉 同じように枠づけされた画用紙に自画像を描く場合、自画像の大きさと自己意識の動機づけ的側面の指標であるホープレスネスとの間には、負の関係が認められるであろう。

方 法

被験者 茨城県下の公立A小学校の6年生2クラス75名(男子39名, 女子36名)であった。

質問紙 有能感の測定には、桜井(1983)が作成したHarter(1979, 1982)の認知されたコンピテンス測定尺度の日本語版が用いられた。これは、①学習に関する有能感、②運動に関する有能感、③仲間関係に関する有能感、④自己価値という4つの下位尺度で構成されている。各項目は4段階評定(4, 3, 2, 1点)で、有能感が高いほど高得点となる。また、下位尺度は各7問で構成されており、その理論的得点範囲は7~28点である。

ホープレスネスの測定には、桜井(1985)の児童用ホープレスネス測定尺度(付録参照)が用いられた。これは、Kazdinら(1983)の子ども用ホープレスネス測定尺度の日本語版である。17項目で構成されており、真偽法(「はい—いいえ」)で回答するため、ホープレスネスの方向に反応した場合1点が与えられる。

実験材料 枠づけされたB4版の画用紙(細い黒

色のフェルトペンで画用紙の端から約1cm内側に、1~2mmの幅で四角い枠がつけられている)、消しゴム、HB以上の濃い黒鉛筆であった。

手続き 1984年6月下旬、前述の認知されたコンピテンス測定尺度と児童用ホープレスネス測定尺度が担任教師の指導の下にクラスごとの集団で実施された。その約1週間後、同じようにクラスごとの集団で、枠づけされたB4版の画用紙に自画像が描かれた。このとき、実験者(心理学専攻の男・女大学院学生1名ずつ)は、各クラスへ行き、簡単に自己紹介をした後、枠づけされた画用紙を配り、「これから、みなさんに、鉛筆で自画像を描いてもらいます。紙を縦にして、必ず全身を描いて下さい。これは絵の上手下手を調べるものではありませんから、楽な気持ちで描いて下さい。しかし、いい加減に描かないで、できるだけ丁寧に描いて下さい。また、隣の人の真似をしないこと、マンガやスタイル画のように描かないことに注意して下さい」と教示して、自画像を描かせた。枠についての質問が出た場合には、「あなたの思うとおりに描いて下さい」と返答した。20~30分で描き終えた。

実験後、ただちに自画像の大きさの測定と質問紙の得点化がなされた。自画像の大きさの測定については、①身長、②頭(首より上)の面積、③からだ(首より上は含めない)の面積、④(からだ)全体の面積(②+③)の都合2種類(身長と面積)で5指標が用いられた。身長(単位はcm)は、自画像の最も高い点から最も低い点が垂直に測定された。面積(単位は cm^2)は、自画像の上に 1cm^2 方眼のビニールシートが置かれ、自画像の部分に入る方眼の個数が数えられた。

結 果

(1) 自画像の大きさと有能感との関係

自画像の身長、頭の面積、からだの面積、全体の面積が別々に、小さいものから大きいものへと一列に並べられ、等分(15名ずつ)されて5群に分けられた。各群の自画像の大きさの平均と標準偏差がTable 1に示されている。

この5群における認知されたコンピテンス測定尺度の各下位尺度得点を用いて一要因の分散分析が行われた。その結果がTable 2に示されている。これを見ると、頭の面積で自己価値に有意な群間差が認められる($F(4,70)=2.66, p<.05$)。この関係を図示したものが、Fig. 1である。第IV群の自己価値平均得点がやや高い値を示しているが、全体としてみると、第II群をピークとして逆Vの字に近い変化を呈しているようである。そこで、群間に有意な

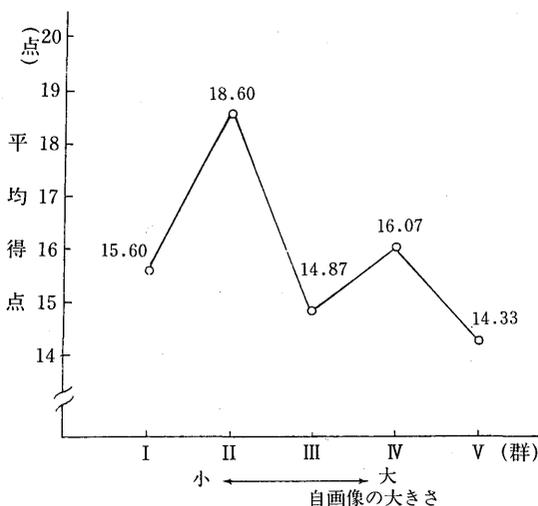
Table 1 各群における自画像の大きさの平均と標準偏差^(注)

自画像の大きさ \ 群	I	II	III	IV	V
身長	20.62 (2.92)	26.23 (0.93)	29.83 (0.58)	32.05 (0.61)	33.89 (0.46)
頭の面積	14.47 (4.57)	26.73 (3.36)	35.60 (2.27)	47.07 (4.28)	78.47 (14.02)
体の面積	69.93 (17.76)	106.73 (9.05)	136.60 (8.12)	165.73 (14.98)	234.53 (44.25)
全体の面積	89.60 (23.93)	134.40 (13.56)	164.93 (19.48)	220.60 (15.93)	295.33 (45.11)

(注) ()内は標準偏差を示す。

単位は、身長が^s cm、面積が^s cm²である。Table 2 認知されたコンピテンスの下位尺度得点による分散分析の結果 (F値)^(注)

自画像の大きさ \ コンピテンス	コンピテンス			
	①学習	②仲間関係	③運動	④自己価値
身長	2.07	0.32	0.46	1.61
頭の面積	0.86	1.32	1.03	2.66*
体の面積	1.74	1.26	0.81	1.27
全体の面積	0.73	0.73	0.25	0.57

* $p < .05$ (注) $df = (4, 70)$ Fig. 1 頭の面積と自己価値の関係^(注)

(注) 数値は平均得点を示す。

差が認められるかどうか平均の差の検定をしたところ、第II群と第V群、第II群と第I群、第II群と第III群の間には有意な差(順に、 $t(70) = 2.99, p < .01$; $t(70) = 2.10, p < .05$; $t(70) = 2.61, p < .05$)が認められ、第II群と第IV群の間には差の傾向($t(70) = 1.77, p < .10$)が認められた。しかし、第IV群と第III群および第IV群と第V群の間には有意な差は認められなかった(順に、 $t(70) = .84, n. s.$; $t(70) = 1.22, n. s.$)。したがって、頭の面積と自己価値の間には、一応逆Vの字の関係があるといえよう。

(2) 自画像の大きさとホープレスネスとの関係

自画像の身長、頭の面積、からだの面積、全体の面積、それぞれの指標において分けられた5群(結果の(1)参照)で、ホープレスネスの得点を分散分析した結果、どの指標においても有意な群間差は認められなかった。しかし、ホープレスネス得点の分布がかなり低い方へ傾斜して正規分布を呈していないので(詳しくは桜井(1985)参照)、自画像の

大きさとホープレスネスとの関係は、スピアマンの順位相関係数 (r_s) でも検討された。その結果、頭の面積に $r_s = -.19$ ($p < .05$) という有意な負の相関が認められた。しかし、身長 ($r_s = -.03$)、からだの面積 ($r_s = -.02$)、全体の面積 ($r_s = -.07$) には、有意な相関は認められなかった。

考 察

(1) 仮説1について

仮説1は、枠づけされた画用紙に自画像を描く場合、自画像の大きさと自己意識の認知的・感情的側面の指標である有能感の間には、逆Vの字の関係(自画像が小さかったり、大きかったりする場合には有能感は低く、自画像の大きさが中程度の場合には有能感が高い)が予想されるとするものであった。分散分析の結果 (Table 2), 自画像の頭の面積と自己価値の間に有意な群間差が認められた。それゆえ、この関係を図示し (Fig. 1), 各群間の差の検定を行ったところ、逆Vの字の変化が認められた。以上の結果より、仮説1は、自画像の頭の面積と自己価値の間では支持されたといえよう。自己価値との間で支持されたことは、高校生を対象とした Delatte & Hendrickson (1982) の場合に、自尊感情との間で支持された点と類似している。しかし、桜井 (1984) が幼児を対象に行った結果、すなわち、学習や運動に関する有能感との間で支持された点とは異なっている。これは、年齢が増加するにつれて、確固たる自己意識が形成され、自己の生活や生き方を対象とした自己価値や自尊感情も的確に認知されるようになり、またそれが有能感の中で最も重要な位置をしめるのではないかと考えられる。一方、頭の面積で仮説が支持された点については、扇田 (1958) が人格投影法、精神分析においては「頭部は自我の中心とみなし、身体衝動を統制する部分であり、社会関係の機能に関連する身体の中での唯一の部分となる」と指摘しており、頭の部分というのは自己(自我)が最も投影されやすい部分であるためと解釈できよう。したがって、自己価値と頭の面積との間で仮説が支持されたことも、このような人格投影法や精神分析の立場からは納得のいく結果と言えるかもしれない。しかし、桜井 (1984) は、全体の面積で仮説1が支持されたことを報告しており、さらに詳細な検討が必要であろう。

そのためには、以下2つの問題点の改善が重要である。第1は、画用紙につけられた「枠」が自己の内面を投影するように作用したか否かを点検することである。枠の捉え方には個人差があるように思われる。枠を自分の世界を保護してくれるものと捉え

る人もいれば、自分の世界を制約するものと捉える人もいるであろう。被験者自身が枠を自発的に描かない限り、この相異を質問紙などでおさえておく必要がある。「枠」に保護的な役割を与えた人を対象に本研究のような分析を試みるのが有効であろう。

第2は、投影性を高めるようにすることである。本研究では対象が小学6年生の児童であり、桜井 (1984) の幼児を対象にした場合よりかなり投影性が低くなっているものと考えられる。また、クラス単位の集団実験でもあり、他者からの影響も投影性を低くする原因の1つになっているかもしれない。今後は、小集団による実験や個人面接にして、この点を改善していく必要があろう。

(2) 仮説2について

仮説2は、枠づけされた画用紙に自画像を描く場合、自画像の大きさと自己意識の動機づけ的側面の指標であるホープレスネスとの間には、負の関係が予想されるというものであった。分散分析の結果は、自画像のどの大きさにも有意な群間差は認められなかったが、スピアマンの順位相関係数では、頭の面積との間に低い有意な負の相関が認められ、この点に関してのみ仮説2は一応支持されたといえよう。頭の面積とホープレスネスの間で仮説2が支持されたことは、頭の面積と自己価値との間で仮説1が支持されたことと、頭の面積および全般的な自己に関する指標(ホープレスネス、自己価値)という2つの点で共通しており、興味深く思われる。しかし、本分析の場合、相関係数が有意ではあるがかなり低いと、さらに詳細な検討が必要であろう。特に、ホープレスネス測定尺度の場合は、①本来、精神的な問題をもつ人を対象に開発されたものであり、また②「はい—いいえ」の真偽法による「1-0」の得点化に基づいていることから、これを健常者に実施する場合、項目をさらに検討し、5段階評定などの回答方法を採用した方がよいのではないかと考えられる。

〈謝 辞〉

本研究の手伝いをしてくださった筑波大学学類生の小川和子さん、小島栄美子さん、鈴木ひとみさん、後藤夏樹君、菅敬一君、瀧口ちひろさんに感謝いたします。

引用文献

- Beck, A. T. 1972 *Depression: Causes and treatment*. University of Pennsylvania Press.
Beck, A. T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L.

- 1974 The measurement of pessimism: The Hopelessness Scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 861-865.
- Coopersmith, S., Sakai, D., Beardslee, B., & Coopersmith, A. 1976 Figure drawing as an expression of self-esteem. *Journal of Personality Assessment*, **40**, 371-375.
- Delatte, J. G., & Hendrickson, N. J. 1982 Human figure drawing size as a measure of self-esteem. *Journal of Personality Assessment*, **46**, 603-606.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-Esteem の研究 九州大学教育学部紀要, **18**, 53-65.
- Hammer, E. M. 1965 Critique of Swensen's empirical evaluations of human figure drawings. In B. Murstein (Ed.), *Handbook of projective techniques*. Basic Books.
- Harter, S. 1979 *Perceived competence scale for children* (manual). University of Denver.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, **53**, 87-97.
- 加藤隆勝・高木秀明 1978 自我・自己 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩 第17巻, 112-136 金子書房
- Kazdin, A. E., French, N. H., Unis, A. S., Esveldt-Dawson, K., & Sherick, R. B. 1983 Hopelessness, depression, and suicidal intent among psychiatrically disturbed inpatient children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **51**, 504-510.
- Koppitz, E. M. 1968 *Psychological evaluation of children's human figure drawings*. Grune & Stratton, Inc.
- Ludwig, D. J. 1968 Self-perception and the Draw-a-Person test. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, **33**, 257-261.
- Machover, K. 1949 *Personality projection in the drawing of the human figure*. Charles C. Thomas.
- 森谷寛之 1983 枠づけ効果に関する実験的研究—バウム・テストを利用して—教育心理学研究, **31**, 53-58.
- 中井久夫 1970 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって得られた知見について—芸術療法, **2**, 77-89.
- 中井久夫 1974 枠づけ法覚え書 芸術療法, **5**, 15-19.
- Prytula, R. E., Phelps, M. K., Morrissey, E. F., & Davis, S. F. 1978 Figure drawing size as a reflection of self-concept or self-esteem. *Journal of Clinical Psychology*, **34**, 207-214.
- Prytula, R. E., & Thompson, N. D. 1973 Analysis of emotional indicators in human figure drawings as related to self-esteem. *Perceptual and Motor Skills*, **37**, 795-802.
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度 (日本語版) の作成 教育心理学研究, **31**, 245-249.
- 桜井茂男 1984 幼児における人物画の大きさと有能感および体格の関係—枠づけ法を用いて—教育心理学研究, **32**, 217-222.
- 桜井茂男 1985 児童用ホープレスネス測定尺度の作成 日本相談学会第18回大会発表論文集, 70-71.
- 扇田博元 1967 絵による児童診断法 黎明書房
- Swensen, C. H. 1968 Empirical evaluations of human figure drawings. *Psychological Bulletin*, **70**, 20-44.

付 録 児童用ホープレスネス測定尺度（桜井，1985）*

1. 大きくなればもっと楽しいことや、よいことがあると思う。(R)
2. 自分の力でうまくできないことは、あきらめてしまう方がよいと思う。
3. 1回目ですぐうまくいかないことは、その後もずっとうまくいかないと思う。
4. 10年後の自分の生活がどんな風であるか、想像することができる。(R)
5. ほんとうにやりたいことをやり終えるだけの時間は充分ある。(R)
6. 現在、興味をもってやっていることは、いつかきつとうまくいく。(R)
7. 楽しいことやよいことは、友達より自分の方に多くあると思う。(R)
8. 運がよくないのだから、よい将来などは望めない。
9. これからさきは、悪いことばかり起こると思う。
10. 自分がほんとうにやりたいことは、できないと思う。
11. 大きくなれば、今の自分よりも幸せになれると思う。(R)
12. ものごとは、自分の思うようにはいかないと思う。
13. ほしいものでさえ、手に入らないのだから、その他のものを望むことなどばかげていると思う。
14. 将来、ほんとうに楽しいことなどは望めないと思う。
15. 明日がどういう日になるのか、まったくわからない。
16. これからは、楽しいことの方が多いと思う。(R)
17. どうせみこみがないのだから、ほしいものを得ようと努力したってむだであると思う。

* (R) は、その回答において、「いいえ」の反応をした場合、ホープレスネスの反応として得点され、その他の項目においては、「はい」の反応をした場合に得点となる。